

描かれた

袋井

袋井市
教育
委員会



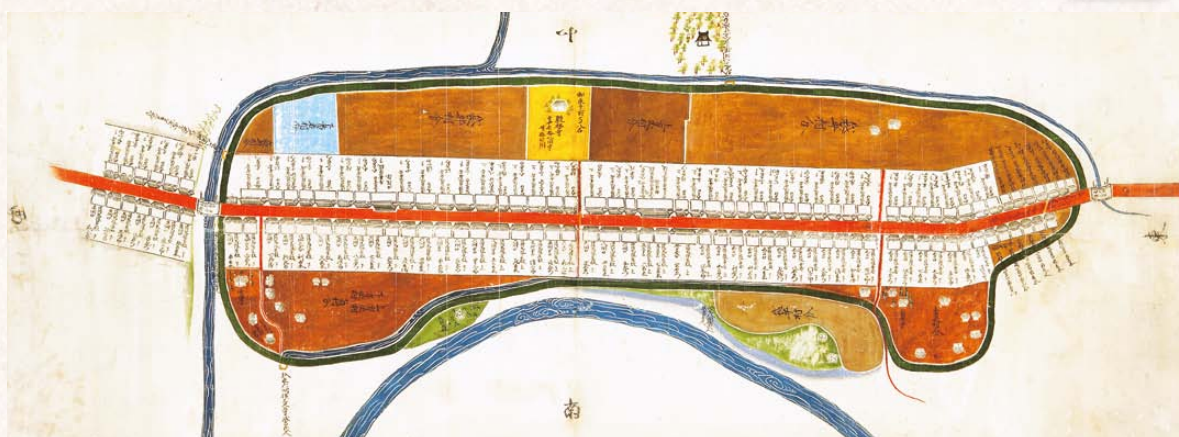
保永堂版東海道五十三次之内 袋井 出茶屋ノ図 初代広重

東海道袋井

袋井宿

袋井宿は、原野谷川や、沖之川、宇刈川などに囲まれ「袋井宿絵図」にも描かれているように周囲に土塁を巡らした宿場です。徳川家康によって東海道が整備された慶長六年（一六〇一）から十五年後の元和二年（一六一六）に袋井宿は定められました。

東の掛川宿と西の見付宿の間、見付へ一里半（約六キロメートル）というところにある小さな宿場です。幕府の領地として、紀伊大納言徳川頼宣が住還の利便のため駿府にいた時に開設しました。



袋井市指定文化財 袋井宿絵図

東海道の画家・広重

歌川広重といえば東海道を連想させるほど有名な風景画家です。保永堂版「東海道五十三次之内」の優美さにもさることながら、東海道を主題とした作品が数多く出版されています。行書、隸書、人物、狂歌入など現在確認されているだけでも三十五種があり、その絵の数は九百を超えています。風景の芸術的な表現から、人物を主としたものなどさまざまなものが出版されています。

広重は寛政九年（一七九七）に安藤源右衛門の子として生まれ、一六才で歌川広重に入門しています。役者絵から出発して、やがて美人画へ進み、三十六才で安藤家の家督を叔父に譲った後、翌年から風景画家として出発しています。



狂歌入東海道五十三次 袋井 初代広重

東海道の絵図

東海道が絵本や版画に描かれて広く頒布されたことは、江戸時代の庶民文化の方向を明らかに示すものといえます。

江戸時代の中期以降に、三都、主な街道、名山巨川、諸国を主題とするものがあらわれ、所旧跡、物産などを地理的に編集し、詳しい解説を施し、これに挿し絵を入れたもので、芸術的表現は多くありませんでした。絵を主として出版されたものは菱川師宣の「東海道分間絵図」を待たなくてはなりません。



双筆五十三次 袋井
三代豊国・初代広重

この後、十返舎一九は東海道中膝栗毛の出版が終わったあとに「東海道中膝栗毛画帳」を出版し、この画帳をヒントとして、北斎を初めてとして多くの絵師が五十三次の版画を出版しました。

北斎や広重らによって精魂を傾けて描かれた風景画は、大和絵における名所絵の復興ではないかと考えられます。



東海道張交図絵 袋井他
初代広重



五十三次名所図会 袋井
初代広重

広重の出世作・東海道



葛屋版東海道五十三次 袋井 初代広重

天保三年（一八三二）の夏、江戸幕府が京都御所へ八朔の節会に御料の御馬を献身する行列について東海道をはじめて旅した広重は、すべてが珍しい風景景勝にふれ、あふれんばかりの情熱をもってスケッチにはげんだと考えられます。その年の内から作図を始め、天保四年（一八三三）に入ってから竹之内保永堂と僊鶴堂鶴喜を版元として、日本橋から順次開版しています。江戸日本橋五十三駅、京を上がりとして五十五枚を完成するのには一カ年の歳月を要し、翌年正月には五十五枚をセットとして売り出しています。広重はこの一作をもって天下第一の風景画家となっています。



東海道中記 袋井
三代広重



契情道中双禄 ふくろ井
英泉



東海道五十三次 袋井 三代豊国

東海道で名声を博した広重より三十年前に北斎は東海道五十三次図を描いています。北斎が東海道に着目する以前にも「東海道名所図会」や栄松斎長喜の「東海道双六」が出版され、十返舎一九の「美人一代五十三次」などもありました。この頃、美人風俗画の画中の上部に色紙形などの小窓を作り、五十三次の宿駅を略画するのが流行となり、北斎は精力的にその手法を取り入れ多くの作品を手掛けています。北斎の画風は広重のような抒情性はなく、北斎独自の自然観照の激しさが現れています。

北斎と東海道版画



春興五十三次 袋井 葛飾北斎



東海道 袋井 二代広重



東海道 袋井 二代国輝



末広五十三次 袋井 二代国輝

袋井を描いた浮世絵では、多くのものに
 風が描かれています。風上げは正月の子ど
 もの遊びと考えられがちですが、浮世絵に
 は田植えをする早乙女の上に風が描かれ、
 稲作の神事の一つと考えられます。

袋井周辺は起伏のない平坦地形で、豊か
 な田園の中の街道を往来する旅人が描かれ
 ています。背景には北の秋葉山や南の小笠
 山と考えられる山を配置していますが、浮
 世絵は江戸での出版物のため、描かれた風
 景は想像上のものが多く、現実のどこを描
 いたものか特定は大変にむずかしくなっ
 ています。

袋井を描いた浮世絵



東海道五十三次 袋井 二代広重

東海道五十三次 袋井 三代広重





行書版東海道 袋井 初代広重

